

リンゴジュース 搾りかす飼料に



え、近年、円安、ウクライナ情勢に伴う穀物価格の上昇による輸入飼料の高騰も重なり、搾りかすを使った家畜飼料に注目が集まるとともに、地域資源の活用で持続可能な循環型農業の確立が期待される。

(稲葉智絵)

リンゴジュースの製造で大量に生じる搾りかす。廃棄処分を減らそうと、県内で合成皮革やバイオプラスチックといった利活用が進む中、弘前大学は半世紀近く前から家畜飼料の研究開発に取り組み。地域ブランドとなった牛肉の誕生に加

から廃棄される搾りかすに着目し、家畜飼料の研究を進めている。開発した混合飼料は良質な発酵で嗜好性に優れ、牛のストレスを緩和する効果があるとされており、黒毛和牛に長期飼育して生産した牛肉が2011年「弘大アップルビーフ」として地域ブランドになった。

同大は1970年代から廃棄される搾りかすに着目し、家畜飼料の研究を進めている。開発した混合飼料は良質な発酵で嗜好性に優れ、牛のストレスを緩和する効果があるとされており、黒毛和牛に長期飼育して生産した牛肉が2011年「弘大アップルビーフ」として地域ブランドになった。

同大は1970年代から廃棄される搾りかすに着目し、家畜飼料の研究を進めている。開発した混合飼料は良質な発酵で嗜好性に優れ、牛のストレスを緩和する効果があるとされており、黒毛和牛に長期飼育して生産した牛肉が2011年「弘大アップルビーフ」として地域ブランドになった。

弘大と黒石市、共同研究

軟らかい肉質と独特の臭みが少ないといった特徴から今年10月、同村のふるさと納税返礼品に採用された。

入原料を配合している現状を踏まえ、「搾りかす」に置き換えることでコスト削減、加えて羊や牛から出たふん尿が堆肥になり、持続可能な循環型農業につながる」と力を込める。ただ、混合発酵飼料はまだ水分量が多いため、運搬や扱いやすさに課題を抱えており、松崎教授は改良を

循環型農業の確立期待

松崎教授によると、流通している発酵飼料の多くは発酵促進のため水分を加えるとし、「搾りかすは水分を含むので、発酵を促す役割も担う」と話す。さらに、高騰している輸入原料を配合している現状を踏まえ、「搾りかす」に置き換えることでコスト削減、加えて羊や牛から出たふん尿が堆肥になり、持続可能な循環型農業につながる」と力を込める。ただ、混合発酵飼料はまだ水分量が多いため、運搬や扱いやすさに課題を抱えており、松崎教授は改良を

進めていくとした。フォーク種の羊を飼育している農家の一人、地域おこし協力隊員の蝦名優さん(44)は8月に羊4頭の飼育を始めて1日2〜3回、牧草と一緒に搾りかすを配合した飼料を与えている。今後の販売に対する意気込みは「黒石に求め、アップルラムを知

用発酵飼料を開発した。20年にはJRAの畜産振興事業を活用して、福島県葛尾村の畜産会社と協同で混合発酵飼料を与えた羊肉の生産に着手。3年間の事業で生産されたブランド羊肉「メルティートン」は、



松崎教授が開発したリンゴジュースの搾りかす配合の羊用混合発酵飼料



羊にリンゴジュースの搾りかす配合の混合発酵飼料を与える蝦名さん

ってもらい、提供するお店を増やしていきたくらい」と意気込む。

◆ 同市で10月、搾りかすを原料とした肉牛・乳牛向けの配合飼料の製造工場が稼働した。同市の青森県りんごジュースの協力を得て、畜産飼料の輸入卸販売などを手掛ける株式会社「カスケティア・トレディング」(本社さいたま市、石井寛文代

表取締役)が開設したもので、大部分を中国からの輸入に頼っていたリンゴ飼料を安心安全な県産へ切り替える。同社は家畜飼料の国産化を目指しており、経営企画室の児島祥治室長は「青森県内に第2、第3のリンゴ飼料の製造工場を開設するとともに、製造したリンゴ飼料を与えた牛肉を銘柄牛にした」と展望を語る。

この画像は、当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。転載ならびにページへのリンクは固くお断りします。